

付録 A: 第7回から第11回における東京湾シンポジウムでの提言, 指摘

表 A-1 : 第7回から第9回における東京湾シンポジウムでの提言, 指摘一覧

シンポ	指摘事項	国総研としての取組状況	進捗率	平均
第7回	自然再生における環境評価の大切さ	環境評価技術の研究課題の立ち上げ等に反映	60%	46%
	市民の目から見た湾の危機的な環境の状況や評価の重要性	東京湾水質一斉調査の結果の広報（東京湾環境マップの作成）などを実施	80%	
	戦略的で分かりやすいデータの取得や指標の具体化が必要	東京湾水質一斉調査の解析などに一部反映	40%	
	自由な市民の感覚を出した取り組みに, 行政・研究者がサポートするという形がいる	多摩川での市民による干潟調査 (SCOP100), 朝潮運河釣り調査などに研究者が関連データの収録, 解析の補助などで参加	60%	
	「海の癒し」を享受できるような, 海の良さを感じていける場が必要	生物共生型港湾構造物の実証実験などに考え方が一部反映された	40%	
	倫理を考え・議論する必要	未達成	0%	
第8回	考え方 (目標) と具体的方法論 (手段) についての整理が必要	海洋開発シンポジウムの特別セッションで議論を開始 (H22-23)	60%	28%
	「最適な生態系」の再生を目指す	未達成	0%	
	失われた勾配の緩やかな浅い海底の回復	委員会などを通じたシーブルー事業での覆砂事業への技術支援	20%	
	おおまかな目標, 価値の共有	第9回の東京湾シンポで, 生き物の棲み処づくりという目標について共有を図る. 海の再生全国会議などで議論を継続	40%	
	環境調和型の自然再生が産業となることが大事	未着手	0%	
	「順応的管理」で具体的に進め, 様々な方々との合意形成の場が必要	第11回の東京湾シンポで, 協働について議論, 海の再生全国会議などで議論を継続	40%	
	リサイクル材の活用	大阪湾での実証実験の実施, 各種リサイクル材の検討委員会などに参加	40%	
第9回	関係者が協働してデータを取得し共有することの大切さ	東京湾水質一斉調査の実施に当たり, ワークショップなどの開催を支援	80%	53%
	環境教育には, 多くの関係者の協力が不可欠, 異業種が交わって交流することが大事	お台場での取り組みに積極的に関与	60%	
	自然再生活動は市民が加わって役割分担と連携を進めながら実施されることが大切	芝浦で一部実施を試行	20%	

表 F-2 : 第 10 回から第 11 回における東京湾シンポジウムでの提言, 指摘一覧

シンポ	指摘事項	国総研としての取組状況	進捗率	平均
第 10 回	モニタリングデータと科学の進歩の協調	東京湾水質一斉調査の解析などに一部反映	40%	34%
	海域の再生の目標設定	一部, 江戸前ハゼ復活プロジェクトなどの立ち上げとして反映	40%	
	調査のターゲットを生物とするなど, 発想を変えた調査が必要	江戸前ハゼ復活プロジェクトなどの立ち上げとして反映	80%	
	ターゲットは, 目に触れやすい岸辺, 浅いところというのを中心とすべき	芝浦アイランドでの取り組みに考え方を反映	40%	
	市民参加型のモニタリングをうまく横並びにして共通項目を拾い出していくような取り組みが必要	多摩川の市民調査への技術支援, 東京湾一斉調査との連携などを模索中	20%	
	一般の庶民の身近な疑問に答えるような, 調査, モニタリング, 研究の実施	未着手	0%	
	情報の量と質を確保するため, 四季に1度ぐらい, 市民による一斉調査をやるということも必要	東京湾水質一斉調査での取り組みを検討中	10%	
	海でも情報化社会を進めるべき	環境データのデータベース化, Web での航海技術の開発, 試行を実施	40%	
第 11 回	環境再生事業の統括のためのコンダクターやプラットフォームの重要性	海の再生全国会議などの活用を模索	10%	33%
	研究者と行政の作業レベルでの協働	東京湾水質一斉調査への研究者の参加を推進	60%	
	海の全国再生会議なども通して, 自然再生の取り組みにおける教訓を共有化できるような情報の共有化を図るべき	研究機関が中心となった第 5 回の海の全国再生会議を開催	40%	
	研究で得られた知識を上手に理解してもらえるような発信や子どもに本当のものを伝えることが大切	研究成果をもとにした環境教材の試作	40%	
	環境再生の目的の共有が必要	一部, 江戸前ハゼ復活プロジェクトなどの立ち上げとして反映	40%	
	自然再生活動のねらいを関係者が共通に認識することが大切	海の再生全国会議などの活用を模索	10%	
全体平均				37%